

記憶を追う

— 幼少期からの縦断研究

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 准教授

上原 泉 (うへはら いずみ)

Profile — 上原 泉

東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了。博士（学術）。清泉女学院大学講師，東京外国語大学大学院准教授を経て，2012年より現職。専門は発達心理学，認知心理学。著書は『想像：心と身体の接点』（共著，ナカニシヤ出版），『自己心理学〈4〉認知心理学へのアプローチ』（分担執筆，金子書房）など。



どのような出来事が後々まで思い出されるのか，また，その内容はどのように変遷していくのかを縦断調査により調べています。協力者の方々の長期にわたる協力があってこそ続けられる調査であり，感謝の念に堪えません。これまで，小学校入学前の子どもで既に幼児期の体験を想起しにくくなっていること，記憶に関わることばの発達，記憶の変遷など，成果の一部については発表してきましたが（上原，1998；2008；2012他），成果のまとめと公表が今後の課題です。以下で，まず，どのように調査を進めてきたか，内容とともに紹介いたします。

研究内容と進め方

この調査を始めたのは，大学を卒業する頃でした。卒業論文の研究で，成人や小学生，高齢者の幼少期の記憶や3，4歳の子どもの記憶を横断的に調査し，関連する従来の論文を読んできましたが，おこがましくも，人の記憶（特にエピソード・自伝的記憶 — 日常的な出来事の記憶や思い出に相当する記憶）の本質は，同じ個人の記憶を縦断的に調べてみないとわからないのではないかと思いつめたのが，この調査を始めるきっかけでした。直接関係する先行研究がないなか，従来行われてきた母子インタビュー調査の要領を参考にしながらい計画をたて，長期的

に協力いただける0歳から2歳台のお子様とお母様を募集することにしました。大学周辺で許可を得て貼らせていただいたポスターや，口コミを通じて，徐々に協力していただけるお母様方から連絡をいただき，インフォームド・コンセントを得たうえで調査が始まりました（お子様が調査の概要を理解されるようになった時点で，お子様からもインフォームド・コンセントを得るようにしました）。一人で個人的に行ってきた調査ですから，一度に何十組もの協力者に併行してお願いすることは難しく，多いときで10組程度の協力者に併行して調査を実施してきました。急な転居で短期間の参加となった方以外は，大方，5年以上参加していただきました。数組の方については，20年近くにわたり協力いただき，現在も調査は続いています。

調査はインタビューの形式をとりました。小学校入学頃まではほぼ2，3ヵ月に1回，小学校入学以降は半年に1回程度の割合で連絡をとり，お母様とお子様のご都合のよい日時を設定してお会いし，協力者のご自宅，研究室，筆者宅のいずれか，希望される場所で調査を実施しました。毎回，前半は，お子様に対して，遊びを交えて，観察，インタビューを行い，残りの時間は，お母様へのインタ

ビューとチェックリスト（ことばや記憶，出来事に関するチェックリストを毎インタビュー時にお母様に渡し，次のインタビュー時まで記入し提出いただいていた）の内容の確認を行いました。1回にお会いする時間は，2歳頃までは1時間程度，それ以降は2時間程度を目安にしておりましたが，お子様の要望で（もっと遊びたい，話したいなど）2～3時間になることがしばしばありました。長期にわたる調査ですので，特にお子様には，楽しく参加して，また来たいと思っていただけるよう，遊びをうまく取り入れました。一方で，無理に参加し続けていただくことを防ぎ，いつでも気軽にやめていただくことができるよう，調査以外でこちらから連絡をとる，プレゼントする等は避け，個人的な関係が強くなりすぎないよう留意しました。

お子様のインタビュー時間中は，遊びながら，過去の出来事に関する質問，絵カードを使った記憶課題等を行ってきました（お子様の年齢が高くなった以降は，お子様にも簡単な質問紙への記述もお願いしています）。一緒に話をする過去の出来事は，チェックリストに記載された出来事に加え，インタビュー時に行う遊びも一部含めました。印象に残るような楽しい遊びを毎回工夫して行いまし

た。インタビュー中にペットボトルの噴水や水風船を床に落として割る、絵の具遊びをする等により、研究室の床を汚したり水浸しにし、慌てて掃除したことが今でも思い出されます。なお、手続きの詳細は上原（2008；2012）を参照ください。

このような方法により、各出来事がどれくらい後々まで想起されるのかを主に調べてきましたが、幼少期については、その想起状況と一部のことばの発達指標との関連に注目して分析してきました。分析結果の一部はまだ投稿準備中ですが、幼児期健忘が生じる過程で一部のことばの発達過程が関連している可能性が示されつつあります。それらのおおよその発達過程や関連性を示したのが図1です（詳細は上原 2008；2012 を参照ください）。幼児期以降については、内容の変遷過程や想起量に注目して分析をすすめています。これらの分析作業のまとめが今後のこの研究活動の中心になっていく予定です。

課題と展望

この縦断調査により、より日常的な記憶の変遷過程を目の当たりにし、筆者個人としては、単一の調査や実験では得がたい、貴重な経験をさせていただいたと思っています。しかし、学術的には問題

や課題がいくつかあるのも事実です。通常の調査や実験に比して、成果を得るまでに相当な時間がかかります。しかも、本研究の場合、協力者数が数人から10人ぐらいと少数であることも（参加年数に応じて、得られた結果間でデータ数が異なるため）、弱点となっています。協力者間で共通した傾向がみられたとしても、どれだけ一般化が可能かという問題が常につきまとうからです。さらに、先行研究がほぼなく個人的にすすめてきたため、確立された研究手法とはいいがたく、内容・手法とも充分でない点もあります。小規模な縦断調査単独で（もちろん、本研究の場合は研究内容の未熟さによる部分が大きいとは思いますが）、継続的に競争的な研究費を獲得するのは難しいように思われます。

このような問題を踏まえ、これまで行ってきた縦断調査を何とか生かす方向で研究を進展させていくことを検討しています。これまでの方法を改良し、少しずつ協力者を増やしながら本調査を続け、個人内の質的变化の詳細を引き続き追究する一方で、規模の大きな縦断調査をあわせて実施していただくと希望しています。調査を通じて、記憶の変遷過程に、語る状況や環境要因の影響、他の要因との関係性が推測されました。記憶

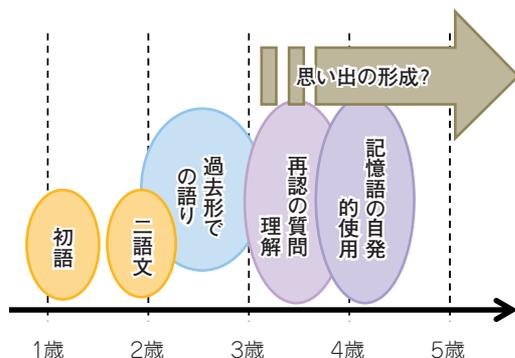


図1 ことばと記憶の発達の概要イメージ

幼児期に重きをおき分析してきましたが、記憶の語りは、幼児期以降の学び、人との関係性の築き方などにも少なからず関連があると思いますので、幼児期以降の変化の過程に重点をうつつて分析、追究していく必要があると考えています。

さいごに

日常的な出来事について語るといことは、人が常日頃行っていることです。縦断調査でこそ、出来事を語るの意味が追究できるのではないかと思います。人間関係が希薄になり社会性が低下しつつあるといわれる昨今、本研究により、思い出が持つ意味や人間関係で果たす役割、どのような語り合いをすればよいかに関する知見を提供できたらと考えています。

さいごに、現在もご協力いただいている協力者の方々、これまでご協力いただいた協力者の方々にこの場を借りて、心よりお礼申し上げます。また、筆者の所属先が変わっても、現在にいたるまで、調査のための研究室の利用を許可していただいている、東京大学（駒場）の心理学研究室の皆様にも感謝申し上げます。

文献

- 上原泉（1998）再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係：縦断的調査による事例報告。『教育心理学研究』46, 271-279.
- 上原泉（2008）「自伝的記憶の発達と縦断的研究」佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）『自伝的記憶の心理学』北大路書房 pp.47-58.
- 上原泉（2012）「子どもにとっての幼少期の思い出」清水由紀・林創（編著）『他者とかわる心の発達心理学：子どもの社会性はどのように育つか』金子書房 pp.183-196.